

## 弱さを超えた人間の強さ

今日は礼拝後に、教会総会が予定されています。思えば新型コロナのために2020年度～2022年度までの3年間、教会総会を対面で開催できず、書面で行ってまいりました。今年度になってようやく教会総会を対面で開催することができます。3年間の苦しい教会の時期を神様が守り導いてくださったことに心より感謝申し上げますと共に、今日の総会が有意義な時となりますよう、神様にお祈り申し上げる次第です。2022年度をしっかりと振り返り、さらに今年度の宣教のビジョンをしっかりと確認して、今年度もこの府中の地で豊かに神様の御心を為していきたいと願います。

さて、そんな今日は聖書の中からヨハネによる福音書21:15～19を取り上げさせていただきました。復活したイエス様がペトロさんとお話をされる場面です。この直前の箇所、21:1～14では、イエス様は漁から上がって来たお弟子さんたちを朝の食事へと招かれましたが、この食事が終わりますと、イエス様はペトロさんに声をかけて、そこから二人の対話が始まっていきます。復活のイエス様によって食卓に招かれたとはいえ、ペトロさんはこの時、なおも罪深い人間としてイエス様の前に立っていました。「あなたのためなら命を捨てます」(Jn. 13:37)と言っていたにもかかわらず、イエス様が逮捕されて自分の身も危なくなると、イエス様のことを三度も知らないと言って否認してしまったついこの間の罪が、深い心の傷になっていたからです。

そんなペトロさんに、イエス様は、「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」と声をお掛けになっていきます。見逃すことができないのは、こうしたイエス様のお声掛け、問いかけが、ペトロさんにとっては自分の心の傷と向き合わされるようなものとなっていたことでしょう。

たとえば、「この人たち以上にわたしを愛しているか」というイエス様の言葉は、ペトロさんにとって、「たとえ、みんながつまずいても、わたしはつまずきません」(Mk. 14:29)と、イエス様に従うことにおいて自分の右に出る者はいないと豪語していた高慢

さを思い起こさせたはずで。また、イエス様が二度ならず三度も、「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」と問われたことは、明らかにペトロさんに、イエス様のことを三度も知らないと言って否認してしまった経験を思い出させたことでしょう。

けれども、ペトロさんはこんなふうにして自分の心の傷と向き合わされる度に、それでも、「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」、「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたにはよく知っておられます」と、イエス様に対する愛を謙虚に告白していきます。そして、その度に、「わたしの小羊を飼いなさい」、「わたしの羊の世話をしなさい」、「わたしの羊を飼いなさい」と、イエス様からキリスト者の群れにご奉仕する重大な務めが与えられていくのです。

ここに描かれているのは、ペトロさんの回復です。こうして、ペトロさんはイエス様に權威を与えられてイエス様の赦しを実感し、自らの過ち、失敗、罪を乗り越えて、再びイエス様に従っていく者として立たされたのでした。

その後ペトロさんがどのようになっていったか、皆さんご存じでしょうか。使徒言行録という新約聖書の文書を読めば分かりますが、彼はエルサレム教会の中心人物としてキリスト者の群れのお世話をし、主にユダヤ人にイエス様の福音を告げ知らせていく、そんな宣教の働きを懸命に担いました。そして、今日の聖書個所でイエス様に、「あなたは、若いときは、自分で帯を締めて、行きたいところへ行っていた。しかし、年をとると、両手を伸ばして、他の人に帯を締められ、行きたくないところへ連れて行かれる」と預言されていたように、最期は逮捕され、刑場に連れて行かれ、十字架の上に両手を伸ばして死刑にされて、その殉教によって神様の御栄光を現したのです。

こうしたペトロさんのお話を思うにつけ、私は思います。その人の評価というのは人生の最後まで分からないものだ。中国のことわざでしたでしょうか、「棺を蓋いて事定まる」という言葉があります。人間の真の評価は棺桶に蓋をして、つまり死後に

なって初めて定まる、それまでは下せないという意味です。

ペトロさんが「お前もイエスの仲間じゃないのか」と周りの人に言われて「いやいや、そんな人知らない」と三回も否定してしまった場面を読んだ時、あるいはほとんどのお弟子さんたちが最後までイエス様に従うことができず、イエス様の十字架まで見守ることができずに逃げ出してしまったことを知った時、皆さんはどう思ったでしょうか。ペトロさんやお弟子さんたち、情けないな、かっこ悪いなと思ったでしょうか。

もしも聖書のお話が、ペトロさんやお弟子さんたちがイエス様を見捨てて逃げてしまっただけで終わってしまっていたら、「ああ、本当にお弟子さんたち、情けないな。かっこ悪いな」、あるいは「人間というのは弱いな。醜いな」というお話で終わったのかもしれない。でも、聖書のお話はそこで終わりでは決してないのです。ペトロさんを初め、お弟子さんたちが復活のイエス様と出会って再び立ち上がり、自らの弱さや罪を乗り越えて活躍していったことをはっきりと記しています。聖書というのは本当に人間の観点からすればおよそ愛されないような人が神様に愛されて変えられていく、そういう記事がたくさん出て来て、神様の愛の偉大さを思わされます。

人生の中で失敗しない人なんかいません。弱さや罪を経験しない人もいません。ここで私たちのことを振り返ってみれば、私たちもまた人としていろんな弱さを持って日々の生活を過ごしています。たとえば怒られるのが怖くて嘘をついてしまったり、言い訳してしまったり、いじめられている人を目の前にして、やめろと言う勇気が出なったり、喧嘩して相手を赦すことができなったり……。皆どこかに罪や弱さを持っていて、どこかで失敗をする。それが人生です。そういう時に自分の罪や弱さを認めるのはショックだし、失敗を乗り越えていくのはとてもしんどくて勇気がいるから、絶対に過ちを認めない人もいるし、開き直って「仕方ないやん」で済ましてしまう人もいます。何もかも人のせいにして、自分の弱さと向き合うことから逃げてしまう人もいます。

でも、イエス様を見捨てて逃げてしまった弟子たちのその後のことを考えれば、弱さや罪、失敗を経験するというのは、決してそこで終わってしまう出来事ではないんですね。弱さや罪、失敗を経験したからこそ学ぶことというのもありますし、そのように自分の弱さや罪、失敗としっかり向き合っただけでそれらを乗り越えた人というのはものすごく強いです。

大切なのは自分の弱さや罪、失敗から逃げないこと、変に覆い隠したりしないことです。その後の人生、その後の生き方を見てもらったら良いのですから。失敗から立ち直って強められていったその生き方、その人生そのものがやがて神様に対する証となっていくことでしょう。

イエス様はいつも私たちのそばで「自分の弱さから逃げないで。一緒に向き合っただけで乗り越えていこう」と話しかけてくれています。そして、弱さを通して、「絶対に見捨てないよ」と言ってくれる神様の愛を知るように、その愛に強められていくように、またその愛を隣の人と分かち合っていくように招いてくれています。失敗のたびに、そこが自分の新たなスタートと思い直して、蘇っていきましょう。強められていきましょう。自らの罪や弱さをも包み込んで立ち直らせてくださる神様の愛にいつも目を向けつつ、互いに愛し合いながらみんなで一緒に歩んで行きたいと願います。

祈りましょう。 ——以下、祈祷——